

クワンティエンの夢

多谷昇太

(一) 散るさくら

世の中を思へばなべて散る花のわが身をさてもいかにさまにせむ
—西行法師

1
弥生の花散る頃弘徽殿前にある桜の木からも散り交いくもるといふほどに、折りからの強い西風に吹かれて盛大に花が舞っていた。その花吹雪に隠れるようにして一人の北面の武士が、殿上など思いも寄らぬ身ながら、招かれて弘徽殿の廂の間に控えていた。年の頃は二十をやや超えたくらいか、眉目秀麗な、絵に描いたような若武者の束帯姿である。「左兵衛尉なむ罷りはべる」中宮付の女房が御簾の奥に言上する。「義清(のりきよ)か」というやんごとなきお方の問い掛けに「さぶろう」と畏まる若武者。数日前に出家を表明して、宮中の少なからぬ人達を驚かせた佐藤義清こと、後の西行法師の未だ凜々しくも貴なるその姿であった。官位低きにも拘らず斯く宮中の評判を呼んだ訳は義清が鳥羽上皇から寵愛され、且つ御前なる中宮の出身家である徳大寺家の家

人だったからであり、それならば後の出世のほどやいかにと囃られもした身を、何故にと訝られたからである。しかしだからと云つて中宮自ら問い質すなど、又左兵衛尉の分際で目通りが叶うということ自体考えられなかった。いったい如何なる椿事の出来であったろうか。「公能(さねよし)から聞いた。義清、出家の訳を申せ」「は」と中宮からの問いにしかし二の句をさわやかに言上できない義清、ややあつて「恐れながら：宮様の御気色、優れ遊ばさずを拝調するに忍びなく、又私奴の世を憐んでのこととございます」と真と形ばかりの理由を繕交ぜにして言を繋いだ。その言葉に檜扇で口元を隠しながら忍び笑いする中宮の様子が御簾越しにも察せられる。何ゆえのことか。「まろの煩いなどそもなにゆえ汝に知れるや、のう堀河」とお付きの女房堀河に水を向ける中宮璋子。

権大納言藤原公実の末娘で白河上皇の養女に出され、のちその孫の鳥羽天皇の中宮となつて、帝との間に五男二女、七人の皇子皇女を儲けている。彼の一大乱、保元の乱の誘い水となつた女性である。史家によつては悪女とも、また不貞の君とも評されがちだが、果たして眼前に畏む佐藤義清こと後の西行

法師が、ああまで傾倒した史実を踏まえれば、強ちそれを鵜呑みには出来ず、真実は必ずや中身のあつた女性と思われ、むしろ彼女を巡つての白河・鳥羽による（即ち祖父と孫による）欲念と面子の争い、その犠牲者と見るべきだろう。人形のごとき美（は）しき女（め）の童（わらわ）、引いては成長して後の美貌をも見込まれて、世の霸王白河に溺愛されながら育つた璋子は、謂ば悲しみを知らない「幸福の王子」のようであり、のみならず、その、養父、白河によつて性愛をも全き自然のうちに摺り込まれた身であれば、その妖艶のほどは、男たちにとつて抜き差しならぬものとなつていたのである。

それほどの彼女ではあつても年令ゆえの鬢りはやはり否めず、鳥羽上皇に接近を図る藤原北家の家成が送つた若き得子（なりこ）に、今は完全に院の寵愛を奪われていた。自信強ければ失意もまた半端ならずであり、我血肉となつていた院始め男たちからの愛を失することは、文字通り自らの命を否定されるに等しかつた。単に寵愛争いに敗れたというだけでは済まない、さぞやの無念がそこにはあつたのである。

「ほほほ、知りませぬ。さだめし義清殿の感性強

気がゆえでございましょう」阿漕の浦など知らぬ、誰ぞ手引きしたると言いた気な、後の西行法師に伍する、和歌の名手たる待賢門院堀河の返事であつた。

まして義清に開陳など出来よう筈もない、ただ俯くばかりである。「賢き者かな。今日日はやりたる、歌詠まんがための恋に等しき汝（な）の出家ならずや。義清、能因法師を真似ぶか？」察しのいい、己が鋭いところを見せて義清を驚かす璋子。まるで母の前で嘘がばれたような面持ちの義清だったが璋子は構わず「数寄者（すきもの）め」と今度は声音を一変させて更に一言を付け加えた。言葉ばかりは擲諭いのままだが、そこにははしなくも息子に去られる母親の如き、もしくは夫に裏の衣を見せられた（＝出家を宣せられた）妻の如き、万端やるかたない、実に寂しげな想いが溢れていた。忽ち義清は「宮様……」と絶句し、込み上げて来るものを必死に抑える風となる。思わず堀河が控えの間に通じる襖へ目を遣り、心ならずも義清へ声づくりをして見せる。他の女房たちが控える前での真情の吐露を恐れてのことでだが、璋子はむしろそれを待っているかのよう。

「仔細ない、義清？……（申せ）」と暫し待つが遂に義清は無言のまま。璋子は遣る瀬なげに溜息をひと

つ吐いて「堀河、硯と紙をこれへ」と所望し「御簾を上げよ」とも命ずる。主の意を悟った堀河が委細ためらわず仰せの通りにすると、上着打ち衣等十二単を地味な色に抑えた璋子の全身が現れた。義清の出家に合わせたとも思うその姿は四十過ぎとは言え尚美しく、伏し目の義清の視線を捉えて離さない。

彼の和泉式部の一首「(牛車の中から袖だけを)飾さじと誰か思はむ……」どころか掟破りの(?)全身露出だった。思う存分見よという、果してそれは俗世からの餞別でもあったろうか、義清の視線に任せつつ何事かを紙に書きつけた。「あな、いみじう散り交う花かな、美しきに」ややあつて顔を上げた璋子が、花吹雪を見て今更のように絶句する。恰も自らが出家するかの如く散る花に何かを見ているようだ。檜扇を口元に翳しもせず「義清、人の真のあり様は如何あるべきや。身の桎梏、立場のそれ……あなや、まるも男なら、許さるべき身なら出家して、漂泊などもしてみたし。義清、汝こそもしけれ。ふふふ」と述懐する璋子に「お戯れを。帝始め皇子、皇女様方の御生母であらせらるる宮様こそ、万人にともしかるべきお方、まるの捨身に何を見べき」と義清は応ずる他なかつた、蓋し中宮の本音と思ひ

つつもである。しかしその言葉に現しに返ったかの如く一つ大きいため息をついて「そよ、皇子らのことじゃ。まるは政(まつりごと)は云えぬが、崇徳始めまるの子らは決して良き目を見ぬであろう。嬰兒のまま逝つた通仁、君仁始めまるは皇子らが悲しゅうてならぬ。相済まぬ。義清、そなたは和歌のみか仏道にも秀でたるゆえ、どうか皇子らを見捨てず、後の彼岸へと導いておくれ」と今度はひたすら母の立場に返つて義清に、いや後の西行法師に璋子は頼み込むのだった。何処となく自らの遠からぬ雲隠れ(死)を予期したような璋子のもの云いに氣押されつつも「これはしたり。いづれの僧正をおきてか斯く未だ沙門にさえならざる者に託さるる。身に過ぎたる大事にこそ」と応ずる他ない義清だったが、蓋し尤もな奏上ではある。しかし璋子は「あな憎し。いつもいつも逃ぐる者かな。されど汝を知れるはまろじや。僧正僧都など知らず。不貞とか、人の我を悪しく云いける折り、この世の業、男の業を一身に被り給いし君なり、見目よく生(あ)れしは咎かと、一人実立ちて我を庇いたるはいつの日か忘れん。世のむなしさをも云いくれしそなたこそ、我僧正なれ。身も心も汝に託してむ。今世も来世も一番弟子た

らん。斯く頼めばこそ阿漕の浦をも過し来つれ……」などと義清が形に逃げることを許さない。この日を置けば最早会うことは出来ないとばかり、控えの間の耳もあらばこそ必死の迫り様である。今は老女房の、主（あるじ）璋子に生涯を尽くした堀河も、そのような主人への愛しさに目元を袂で隠す。

しかしまさにこの時「宮様！」と咳払いもせず控えの間より女房が声を上げた。かかる非礼を怪しんで目元を拭いつつ堀河が急ぎ駆け寄る。

「何事じゃ」と襖を開けて問えば「院渡らせられます」との御注進。璋子に目を遣つて「例の、得子様立后のごとでございましょう。宮様、ここは急ぎ……」と早口で上奏し且つ女房どもへなるべく院を引き留めるよう指示をする。璋子は是非もなく先ほど認めた唐紙を文袋に入れて御座より降り、御自ら義清に手渡した。「義清、汝の大願成就を願う。これは心付けじゃ」そして更に「まろは唯に桜花であった。色衰えて人の愛でざれば存うは難し。後の世とも汝に相見てむ。今は罷りね、義清……いや、法師様」と云つて勿体なくも義清に合掌拝礼した。余りのことに義清が返礼しようとするが「義清殿、院の御目に止まつては、今はただに……」と堀河がその背

を押す。人が噂する阿漕の浦とも思える現場を院に見られることはやはり憚られた。院の側の性の乱脈は一切問われず、一世一代の「聖俗合体」と璋子が期した逢瀬だとしても、それは絶対的に、且つ永遠に認められることはないからだ。義清は文袋を押戴いて懸命の一言を云い残した。「いずれの世にか忘れ聞こえむ（いつの世も決して忘れません）。宮様、いや、璋子様！おさらばでおじやりまする！」北面の武士として最後の義清の姿。散る花の下御庭を駆け抜けて行つた。

（二） 御歌

自らの領地田仲庄の館に帰つて文袋の紐を解く。そこには括られた中宮の御髪と心付けが、そして桜模様の浮かび上がった唐紙が入っていた。御歌が認められている。「うつろいの花こそ散りね散るならば西方行きて花においせむ」。

あさましや出家後の妻子への扶養はともかく、自らへの扶持さえも万端怠りなく備（しつら）えた我身など、死を覚悟したかのような中宮様の御歌から見れば、まこと遊び事ごつ数寄者でしかないと、つくづく思わざるを得ない義清であった。

せめて、出家後の法名に御歌の意を頂いたものか
どうか、そこまでは判らない。しかし桜花の散りざ
まを誓願とする西行の本懐の所以とはなつたであろ
う。
(以下次号)

「小説返歌」

おもかげの忘らるまじき別れかな名残（なごり）を
人の月にとどめて

嘆けとて月やはものを思はするかこち顔なるわが涙
かな

— 右二首、西行法師

